

【第2部 ワークショップ③】

ネット社会と女子非行

話題提供者

矢 作 由美子

敬愛大学国際学部 非常勤講師

司会

久 保 秀 雄

社会安全・警察学研究所 所員

京都産業大学法学部 准教授

(1) はじめに

「ネット社会と女子非行」をテーマとしたワークショップ3は、話題提供者として矢作由美子先生（敬愛大学国際学部非常勤講師）をお迎えした。矢作先生からはテーマに関する最新の動向をご紹介いただくとともに、問題提起を行っていただいた。そして、参加者全員がグループに分かれてディスカッションを行い、それぞれの立場から知恵や経験を持ち寄ることで問題へのより良き対処を考えた。

(2) 話題提供

矢作先生は、女子非行はそもそも性に関わるケースが多いため表面化しにくく暗数も多いので、男子の非行に比べると目立ちにくく見えにくいという特徴があることを紹介された。その上で、スマートフォンの普及などを通して低年齢層にもネット利用が広がることによって、大人にとって女子非行はますます見えにくくなりつつあることが現在の問題であると指摘された。たとえば、子どもたちは保護者や学校の先生が知らないような新しい無料アプリなどを利用して、身近な大人の目が届かないネットを介して非行に関わっていたりするのである。

ところが、学校に配布されている生徒指導のための手引きでは、現在でもまだ一昔前のダイヤルQ2の例が紹介されるに留まっていたりするという。したがって、ネット利用が普及している現在では、女子非行への対応が大きく立ち遅れてしまっている。しかも、女子の場合は男子に比べて関わり方が難しくデリケートさが必要とされるため、非行を防止したり立ち直りを支援したりする際にも慎重で思慮深い舵取りが要求される。そこで、参加者同士が交流し知恵と経験を持ち寄り、より良き対処を協働で探ることが重要な意義を有する。こうした趣旨の問題提起を、矢作先生から行っていただいた。

(3) グループ・ディスカッション

以上のような問題提起を受けて、参加者同士のグループ・ディスカッションを実施した。参加者は、更生保護関係者・警察関係者・行政関係者・教育関係者・新聞記者・研究者といった方々であり、ランダムに4つのグループ（1グループあたり5人前後のメンバー）に分かれていただいた。そして、グループごとに自己紹介となるアイスブレイクを実施した

後にディスカッションを行い、付箋や模造紙を用いながら意見を集約し、最後にグループごとの成果を他グループに向けて発表していただき全体共有を図った。参加者の皆様から頂戴した主なご意見は以下の通りである。

- ・ネットの新たなサービスに大人がついていくことができていないのは確かである。
- ・実際に子どもたちと接していると、友人関係や恋人関係についての感覚があまりにも違いすぎて驚く（たとえば、ネット上だけのつながりで一度も顔をあわせた経験がなくても「恋人として付き合っている」ということを当たり前のように言う）。
- ・ネットは匿名なので身元がばれる心配がないし、万能感が得られやすく、子どもでも簡単にお金を稼ぐことができる便利さがあることから、非行へのハードルが下がるのではないかな。
- ・非行へのハードルが下がる分、罪悪感なく軽い感覚で事件を起こしている一方で、自分が受けるデメリットを分かっている子どもたちに接することが多い。
- ・加害者であると同時に被害者であることがとりわけ多い女子非行の場合には、加害はもちろん被害も表面化しにくい中で、周りの大人がどう気づいてあげられるかが非行の深化を防ぐ重要なポイントになってくる。
- ・そのような気づきを得られやすいのは、子どもにとって敷居の高い公的な機関ではなく、少し年長のお姉さん・お兄さんのような存在ではないかな。

（4）おわりに

予定終了時刻を大幅に超過したのは運営担当者として反省すべき点であるが、時間を超過するほど活発で充実したディスカッションが行われた。「安全・安心へのよりよい取り組みの実現に向けて、多様な参加者を結ぶ協働の基盤づくり」（研究所の紹介 Web ページより抜粋）をめざしている当研究所らしいワークショップになったと言えるだろう。

最後に、今回のワークショップの運営にあたっては、京都産業大学コーオペ教育研究開発センター・F 工房の大谷麻予さんにファシリテータとして甚大なるご協力を頂いた。矢作先生はもちろん、参加された皆様、そして大谷さんに、心より厚く御礼申し上げます。